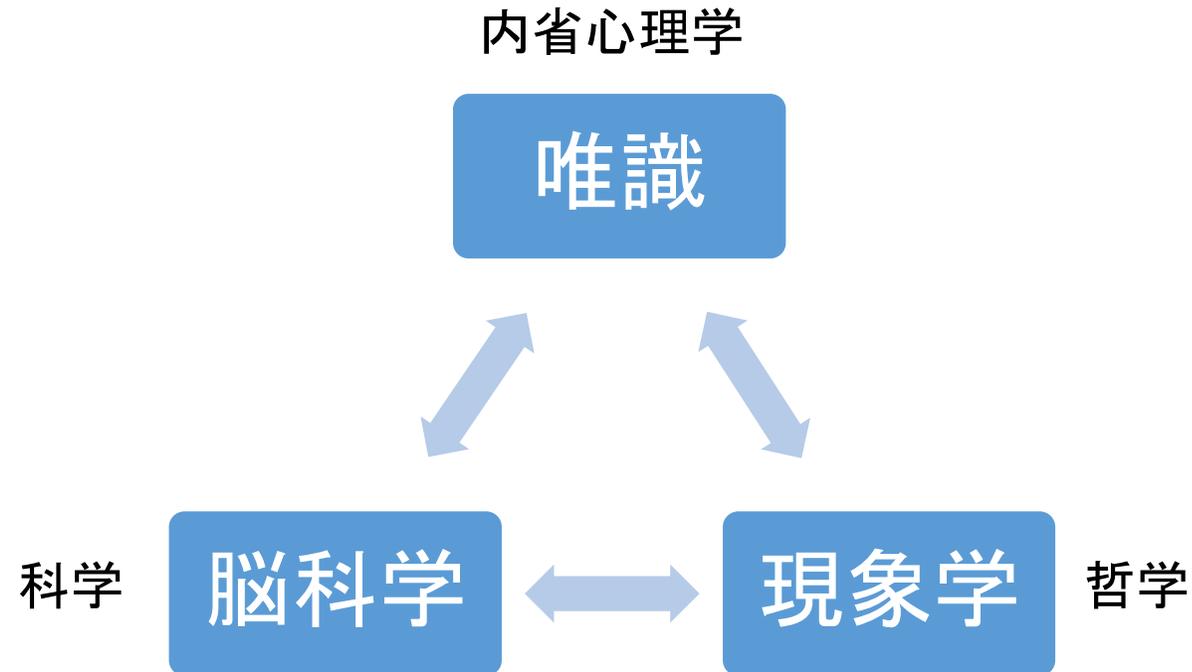


# 心と脳の関係：包括的一元論の構築

脳科学・現象学・唯識教義の三者における共通点を見出すことにより、  
脳(物)と心を隔てる歴史的・文化的・科学的な障壁を乗り越えることを目指す。

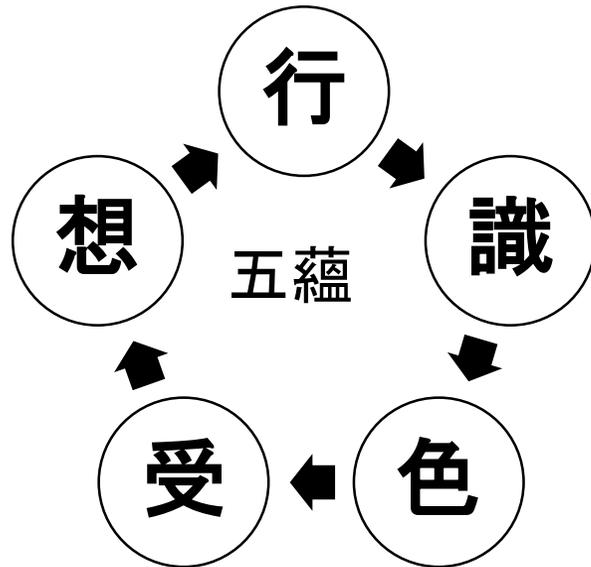


## 仏教の根本的概念である「法：ダルマ」は、 現代科学的世界観における「プロセス」に対応する。

原始仏教では、人間がいかなる時、いかなる所においても、「順守すべき永遠の理法」があると考え、それを「法」と呼んだ。つまり、「法」とは人を人として「たもつ」ものである。仏教では、永遠に妥当する法の権威を尊重する。ブッダの最後の教え・「自灯明・法灯明」における「法」は、そのような古来の「天則」に基づく普遍的真理を意味する。

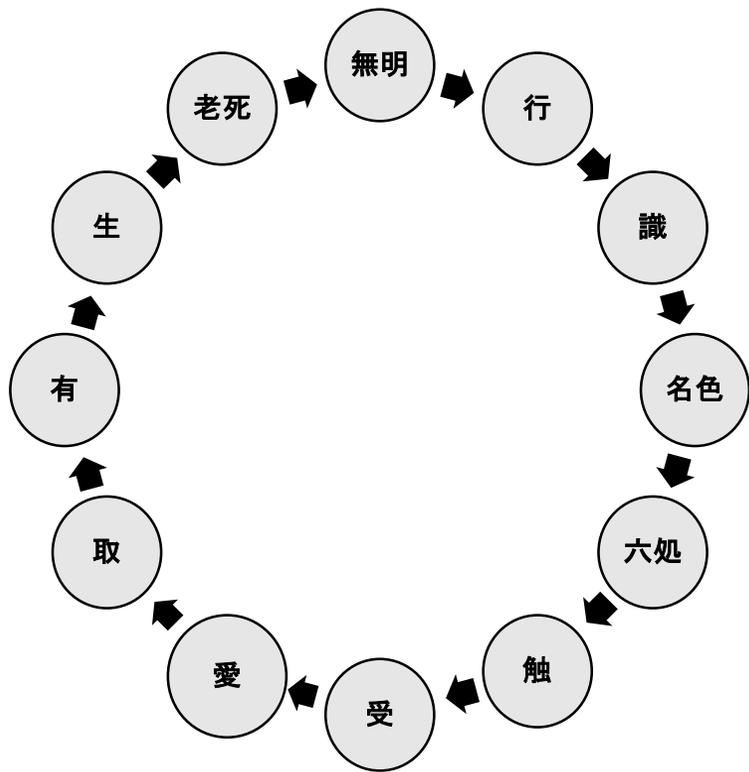
ウパニシャッド哲学において、「法」は宇宙の根本原理である「ブラフマン」と、個人の本質である「アートマン」へと昇華され、それらは恒久不変の実体であると考えられた。それに対してブッダは、万物は火・炎のように流動的で一過性の現象であると考えた。実体の存在論からプロセスの存在論へのこのような転換こそがブッダの思想の最大の特色であり、またそのことが仏教思想の現代的な解釈を可能ならしめている。

「五蘊」とは、心の基本的モジュールである。



仏教における「世界」とは、「もの」として存在する外的自然ではなく、心が描き出す内的世界である。内観・瞑想によって把握された意識・心の流れが、そのまま森羅万象の構成要素として把握される。ブッダは、「火・炎」のメタファーを用いて表現される「五蘊」(色・受・想・行・識)を、万物の基本的構成要素とした。現代語で言えば、それは「心のプロセス」における基本的モジュールにほかならない。

# 十二支縁起



「十二支縁起」とは、夫々が「法」である十二の支（ニダーナ）を、「縁起」によって結び付けたものである。ブツダの「諸行無常・諸法無我」という思想は、この縁起の理法に立脚している。「縁起」は、「此れ有るが故に彼有り。此れ無きが故に彼無し」と表現され、「～が故に」という語を含むことから、現代科学的世界観における「関係性 relationality」という概念に対応する。それはすべての現象が、究極的原因としての「神・造物主」無しに、循環的因果性（関係性）に基づいて生起するという考え方である。

# 瑜伽行派が取り組んだ問題

瑜伽行派(唯識派)は、「我法俱空」とする龍樹の「空の思想」を継承したが、輪廻からの解脱を究極の目的とする点においては、瑜伽行者としての伝統を保っていた。従って彼らは、アビダルマ以来の課題である、無我であるのにどうやって過去世の業が今世に繋がっているのかという問題と並行して、「空・無我」という根本教理に対して、「瑜伽行者」としての主体性をどのように見出し確保するか、という問題と取り組んだ。それは同時に、「空の思想」のニヒリズム的な傾向を超克することでもあった。

こうして唯識派は、(一)唯識観、(二)三性説、(三)アーラヤ識を三つの柱とする緻密な学説を構築した。

## 唯識観とフリーマンの知覚論

唯識説は、客観的世界を外界の实在とはせず、識内の存在として理論化し、個の識＝心は、世界大の規模、むしろ宇宙をも心に浮かべるものとして、客観界もまた自己に摂めているとする。

アリストテレス以来、「表象」(影像)とは、外界の忠実な再現であると見なされてきたが、フリーマンは、「表象」とは、個々人の脳と心が外界からの物理的刺激をきっかけとして自分で作り出すものであるとした。このようなフリーマンの知覚論は、唯識における「識所縁、唯識所現」という教義と合致する。

## 三性説：心の全体＝虚妄分別

### 三性

- ・遍計所執性：仮構されたあり方。
- ・依他起性：他によるあり方という意味であり、縁起を指す。
- ・円成実性：修行によって完成されたあり方。

虚妄分別である依他起性は、十二支によって縁起したものであるが故に迷妄から逃れることができないのであるが、唯識は、その依他起性自体が自らを変えることが可能であると考える。識自体が変質して、新たな識へと生まれ変わり、覚り(=智)を得ることを「転識得智」という。それは人間に主体性を認め、その先に向上があることを示そうとする考え方である。このような唯識の考え方は、志向性が歴史的な文脈から生じることを認めつつも、遺伝的・環境的決定論を否定し、人間の主体性と自由意志を強調するフリーマンの考えと共鳴し合う。

## 五位百法における心王と心所の相応関係

唯識は、心が100種類の心的要素(百法)から成るとし、それらを五つの位(心王・心所・色・不相応・無為)に分けた。五位の内、「それ自身の存在性」を有するとされる心王・心所と、それらの相応関係を下図に示す。

	〈遍行〉					〈別境〉					〈善〉																							
	触	作意	受	想	思	欲	勝解	念	定	慧	信	慚	愧	無貪	無瞋	無癡	勤	輕安	不放逸	行捨	不害													
前五識	◎	◎	◎	◎	◎	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○												
意識	◎	◎	◎	◎	◎	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○												
末那識	◎	◎	◎	◎	◎				○																									
阿頼耶識	◎	◎	◎	◎	◎																													
	〈遍行〉					〈煩惱〉					〈随煩惱〉										〈不定〉													
	触	作意	受	想	思	貪	瞋	癡	慢	疑	惡見	忿	恨	覆	惱	嫉	慳	誑	諂	害	僞	無慚	無愧	掉舉	憍沈	不信	懈怠	放逸	失念	散乱	不正知	悔・眠	尋・伺	
前五識	◎	◎	◎	◎	◎	○	○	○														○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			
意識	◎	◎	◎	◎	◎	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
末那識	◎	◎	◎	◎	◎	○		○	○		○													○	○	○	○	○	○	○	○			
阿頼耶識	◎	◎	◎	◎	◎																													

# 八識とは何か

唯識において、心王（識）はアーラヤ識・マナ識・意識・前五識の八識に分けられる。「虚妄分別」と呼ばれるのは、「縁（因）としての識」として生起するアーラヤ識である。それは個人存在の根本にある、通常我々が意識することのない識であって、八識の最深層に位置する。そこに蓄積されている過去の全ての経験の潜在余力（習気）は、現在および未来における自己の身心および対象世界、すなわち一切諸法を生み出す因となるから「種子」とも呼ばれ、それら一切法の種子を保つ「アーラヤ識」のことを「一切種子識」とも言う。

アーラヤ識は、「無始」（宇宙の始まり）以来の経験を保持しつつ、身体を維持し続けながら恒常的に働くのであるが、それは一瞬一瞬に生じては滅すること（刹那滅）を繰り返しつつ持続（相続）する無常なる存在である。

## マナ識・前五識・第六意識

- アーラヤ識は潜勢的な原因の識として生起し、その果として、それ以外の七つの識が「能取」としての識として現れる。アーラヤ識と七種の識との間には因と果の関係がある。
- すべての識は、相分(所取)－見分(能取)の関係で結ばれている。見分とは「見るもの」、相分とは「見られるもの」の意味であるが、各識それぞれ自体が、相分(所取)と見分(能取)に分かれ、より上位の識の見分が下位の識の相分を見るという関係がある。
- 第七識であるマナ識は、根源的な心であるアーラヤ識を対象として、それを「我」であると考えて執拗に執着しつづける心、すなわち深層に働く自我執着心を意味する。
- 前五識は、眼・耳・鼻・舌・身という感覚器官および身体から生じる識、第六意識は全ての識を統合する識である。これらの「六識」は、現代語の「表層意識」に対応する。

## 遍行の心所(五遍行)の働き

- 心所とは、意識に上る個々の心の働きと、それを生み出すメカニズムを意味し、現代心理学でいうモジュール、およびそれが生み出す現象的な心に対応する。心所は、遍行・別境・善・煩惱・随煩惱・不定の六群に大別される。
- 触・作意・受・想・思の心所を、まとめて五遍行と呼ぶ。「触」は、感官(根)と対象(境)と認識主体の和合(三事和合)により識が生じること、「作意」は感覚器官の働きを対象に集中させ、より鋭敏にすること、「受」は、感覚の生起に伴って快・不快の感情が生じること、「想」は統覚、「思」は意思を夫々意味する。
- 五遍行は、常に全ての識を貫通して作用し、八識の統合と、各層における心所の相互作用を推進する働きを有するので、フリーマン理論における「志向性の弧」と同じ役割を果たす。

# 「三種の転変」が、心のダイナミズムを生み出す

五位百法における縁起とは「転変」であり、それは種子の地平（「因転変」という）と、識の地平（「果転変」という）との両方において生じる。因転変には次の三種がある：

1. 異熟転変：業（カルマ）の果である種子が貯えられた結果、形成され存続するものが輪廻の究極的な主体であるアーラヤ識となる；
2. 思量転変：アーラヤ識を拠り所とし、そこに貯えられた種子が転変したものが自我意識としてのマナ識となる；
3. 了別境転変：アーラヤ識とマナ識を背後にもちつつ対象を認識し、認識作用がもたらす種子をアーラヤ識に植え付ける（薫重する）ものが表層意識としての六識となる。

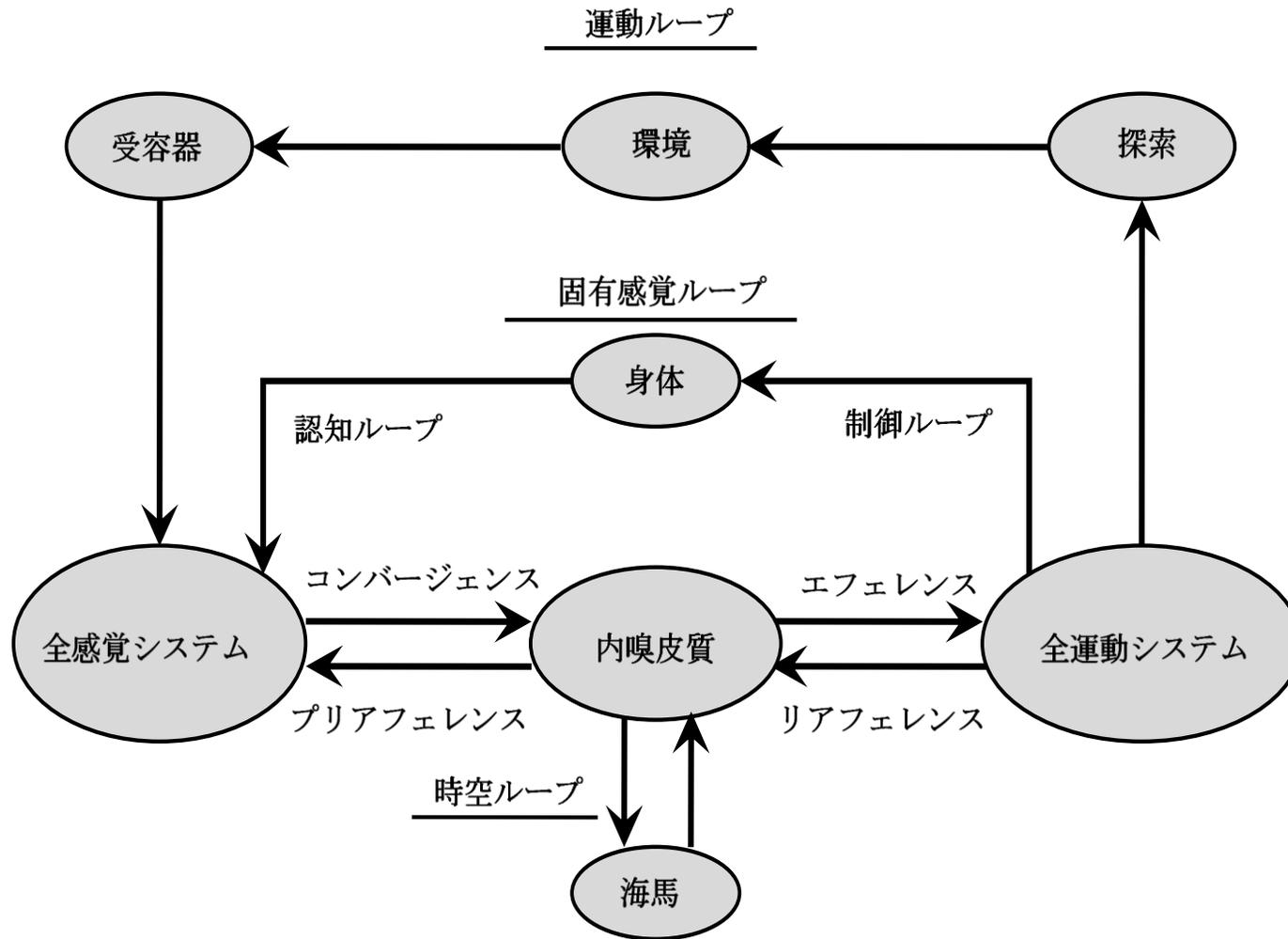
## 識転変のダイナミズム：種子生現行と現行薫種子

- 刹那ごとの識の連続性は、専らアーラヤ識に托されている。刹那を挟んで変化する前の識が次の識に及ぼす影響を「習気」と言い、「種子」とは次の刹那の識から見た「習気」である。種子と識は、五遍行を介して、次のような相互作用を営む。
- 「種子生現行」：種子と他の識との相互作用によって、六識の働きの内容が生み出される。
- 「現行薫種子」(薫習)：種子が他の識を通過する際に受けた影響を保持しながら、アーラヤ識に再び取り入れられて保存される。
- 「種子生種子」：アーラヤ識が次刹那へと連続する。

## 八識における心王・心所間の関係。

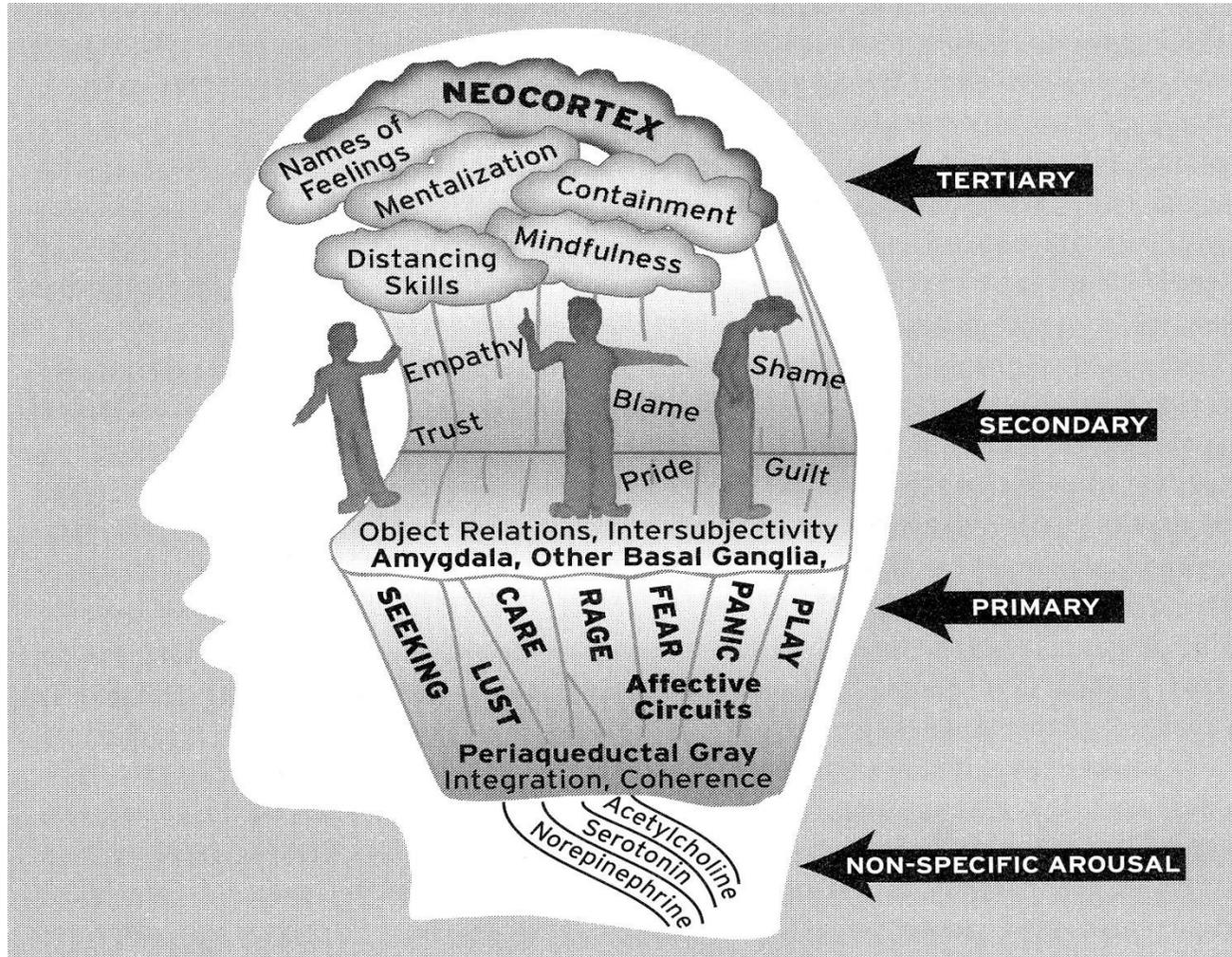
- 潜勢的なアーラヤ識と、顕勢的な七識とが、因・果転変および遍行の心所の働きを介して循環的でダイナミックな因果関係(関係性)で結ばれていることが、唯識説において考えられている縁起である。これら八識は外界に対して閉じており、識自体がその内部で因となり果となって縁起している。そのことが、虚妄分別が「依他性」であるということの意味である。
- これらの階層的な「識」は、全てアーラヤ識から生じたものであるが、それらが相互的・循環的に作用することによって、識の統一性・全体性・志向性が生じる。
- このような八識の構造と機能は、フリーマン理論のニューロダイナミクスとよく合致する。

# フリーマン理論における「行動・知覚サイクル: 志向性の弧」





# パンクセップ理論における情動システム



新哺乳類脳 — 前五識・意識

旧哺乳類脳 — マナ識

爬虫類脳 — アーラヤ識

## 唯識教義とフリーマン理論との共通点

両理論の様々な側面	フリーマン理論	唯識教義
包括的一元論	デカルト的二元論の克服	身心一如
認識論	認識論的独我論	識所縁、唯識所現
存在論	過程の实在論	諸行無常・諸法無我・五蘊
自我の否定	エージェントとしての自我の否定	無我・我法俱空
自己の主体性	志向性の全体性・統一性・意図	自燈明・法燈明
自然の形成力(生命力)	複雑生命有機体の自己組織化・志向性	無明と行
関係性(因果律)	循環的因果性(関係性)	縁起(因縁)・空
心の基本的要素	志向性の弧の構成要素(モジュール)	心王・心所
現象的な心	大域的アトラクターの形成と遷移	ダルマ・法・識転変
現象的な心を生み出す中心的メカニズム	志向性の孤	五遍行

## 唯識教義とフリーマン理論との共通点

知覚による経験の獲得	同化	触・受・想
心のモジュール性	知覚・認知・運動・情動に関わる全てのモジュール	五蘊・五位百法における心王と心所
モジュール間の相互作用	ニューロン集団が形成する振幅変調パターンのメゾ／マクロスコピックな相互作用	心王・心所間の縦横の自由な相応関係 — 識転変 (パリナーマ)
意識の中断	ヌルスパイク	刹那滅
知覚と行動の開始: 注意	プリアフェレンスとエフェレンス	作意
心と脳の階層的構造	[古皮質—旧皮質—新皮質]が形成する階層構造 (The triune brain)	八識 (アーラヤ識—マナ識—意識—前五識) における階層構造
心の統合的作用	志向性の孤の働きによる脳の全領域にわたる大域的アトラクターの形成	アーラヤ識と五遍行による心王・心所の縦・横の相互作用による (第六) 意識の形成
意識の流れ	カオス・ダイナミクスによる大域的アトラクターの遷移	識転変・刹那滅
意識の役割	ダイナミック・オペレーターとしての意識	第六意識
主観と客観	大域的アトラクターの分極化	分別: 識の見分 (能取) と相分 (所取)
自己の変革	脱学習と学習: 洗脳	識転変・智慧・覚り・転識得智

# 結論

1. 知覚の現象学・フリーマン理論・パンクセツプ理論・唯識教義は、次の共通点を有する：
  - i) 基本的な心の働きをモジュール(法)として捉える；
  - ii) 心のモジュール(法)を発生学的・遺伝学的な見地から階層化する；
  - iii) 心のモジュールは、循環的因果関係を介して、ダイナミックな相互作用を営む；
  - iv) 志向性の弧(遍行の心所)の働きが、知覚・意識・感情・情動・行動を生み出す。
2. 唯識が示す心のメカニズムは、脳のメカニズムとの明確な対応を有する。
3. 自己の主体性と自由は、脳(心)がダイナミックな複雑系であることに基因する。
4. フリーマン理論において「大域的アトラクター」として定義される心は、唯識・三性説における「転識得智」と同様に、環境や遺伝によっては必ずしも決定されない高次の精神性 (spirituality) を持つことができ、そこに人間は、「物」とは異なる独自の存在の地平を有する。